

## Rio de Channel 特別編 R

「十字架」をテクモ原作スタッフが小説化！  
「ゲームマガ」に書き下ろされたドラキュラの封印が解かれるまでの物語を完全再収録！

# 『十字架』復活前夜

プレストーリー

第0話

「セーラ姫の願い～メイド・エミリは見た！  
巨乳の姫様の手で、呪われた城の封印が解かれる！」



「エミリ！ 貴様いったい何をしておるのじゃ！  
セーラ姫様はどこにいったのじゃ!？」

侍従長であるマギ老の、曲がった背中が怒りにわ  
なわなと震えているのをぼんやり見ながら、あたし  
は遠くの音を聞いていた。

アクシデントで中断された舞踏会の音楽は途絶  
え、いらだつ客の怒声や、押し合いへし合い家路に  
向かう馬車の軋みが、森の闇にむなしく響いている。  
辺りな場所にある城は少なくないが、我が城は、格  
別荒れた道のりの果てにある。客にしてみれば、馬  
車旅で、尻を痛めてまで来てやったのに、美貌の姫  
君が不在ではそりゃ怒るわよね。

「なぜ、おまえが姫さまの扮装などを！ いつも  
のメイド服はどうしたのじゃ！」

あたしは、おびえの中に一握りの媚びを織り交ぜ  
て、反省のフリをしてみせる。

童顔ながら美少女と言ってい外見は、立派な才  
能のひとつ。こういう時にこそ使わないと。

「この馬鹿者が！ おまえごときが、姫さまに化け  
るなどできと思ったのか！ 鏡を見ろ！」

ありゃ、これはひどい。

鏡に映ったあたしの顔は、悲惨の一言だった。

おしろいのつけすぎで、顔色は死体みたい。汗で  
溶けかけた頬紅は大流血にしか見えない。致命的な  
のは目の周りの黒々としたマスカラで、まるで殴ら  
れた拳闘士のようなだ。

「……」これでは、得意技のオドオド顔も効果半減だ。  
いつもなら、気弱そうに「教養のない、村上がり」の愚  
かなメイドを許してください。は、反省してるんです  
う」とささやくだけで、皆イチコロなのだけれど。

しかしこれで舞踏会に出ちゃったんだ。うわー、  
舞い上がってたんだなあ。

あれは今晚の舞踏会にそなえて、セーラ姫様の衣  
装あわせをしていた時のことだった。

あたしより頭ひとつ高い、曲線だけで作られた身  
体をおりまげるように、姫様はこちらをのぞきこん  
できた。

「エミリ、親友であるあなたに相談があるの……」  
そう切り出された時には、余裕があった。

「わたくしのかわいいエミリなら、お化粧で、さぞ  
かし素敵な姫君になれるわ」

そう楽しげになっけられた時にも、くらりと  
きたものの(なにせ姫様は嘘をつけない人なのだ)まだ  
まだ平静を保てた。

「今日の舞踏会をね、抜け出したいの。姫君になっ  
たエミリなら、わたくしと交替しても、誰も気づか  
ないわ」

そんな姫様のナイスアイデアを、誇らしげにご披  
露いただいた時でも、まだ、「おいおい、そりゃ無理  
でしょ、これは断らない」と思える正気があった。

だけど！ 姫様が両手を前に組んで、ためらいが

ちに「ね、おねがい……」と甘い声でささやいてきた  
瞬間に、理性はすっとなでしまった。

胸の前でそっと合わせられた両腕は、豊かな胸を  
左右から寄せて持ち上げ、微妙に形をゆがませる。

黒いパーティードレスの大きえぐられた胸元か  
ら、そのたわな果実が、今にもまろびでそうだ。

あたしが男だったら、目がくぎづけになるだけじ  
ゃ、きつとすまない魔力。

まわりの空気に、目に見えない薄桃色のベールが  
かかった気がする。

姫様のまばたきが生み出した無数の星が、あたし  
のまわりできらめいている気がする。

姫様は、もちろん美人なのだけど、ひとつこい  
大きな瞳が、いつもキラキラしていることもあって、  
かわいらしい人という印象の方が、より強い。

ただ、ふとした瞬間に、とんでもない色香が顔を  
出すことがあるのだ。かわいらしさの殻をバリバリ  
と食い破りながら、不釣り合いなフェロモンという  
魔物が湧きでてくる。

幼い子供のような純心という見習い騎手が、熟れ  
きった大人の身体という凶暴な暴れ馬で、暴走して  
いるようなものと言えいいだろうか。

「ふふふ、エミリのおはな、かわいいね…」

姫様の、絹のようにすべすべな指先が、化粧用のパ  
フをつまんで、あたしの顔をなでまわしはじめる。

あたしの頭の中は、真っ赤な顔とは対照的に、真  
っ白になっていた。

見世物師の団が城に興行に来た時、催眠という  
手管を見せる芸人がいたっけ。

まさにあれにかかった感じ。

まあ、百歩ゆずって、なんとか正気を保てたとし  
ても、結局あたしは姫様の望みどおりにしたことだ  
ろう。

姫様の“お願い”は特別だから。

セーラ姫様は、家臣団にかしずかれるのが仕事。  
それは身分が尊いからとかじゃなく、王家の血統を  
残していくということが、最大にして唯一の義務だ  
からだ。笑えることに、水を飲む量、時間、お手洗  
いで用を足す回数まで、お世話係が決めているのだ。  
自分の身体なのに、自分のものではない。そんな理  
不尽に姫様は全力で応え、すべてを無批判に受け入  
れてきた。

その代わり、その“仕事”に悪影響を与えないの  
であれば、彼女が本気で望めば、周りは多少の軋轢な  
ら踏み潰してでも調整し、それをかなえようとする。  
だから姫様は、自分自身の意志たる“お願い”を軽々  
しく使うことはない。

2年前、あたしが城に拾われたことは、数少ない  
特例のひとつだった。

あたしエミリは、うらぶれた寒村で青春を迎えた。

外見に似合わず悪知恵がまわるあたしは、ちっぽ  
けな世界で、静かに生涯を終えるのはいやだった。

だから、自慢の(そこそこ程度の)ルックスを過信し  
て、村の男たちの間をうまく立ち回ろうとしたのだ。

その結果、自分の村と隣村の男どもの双方に、私  
刑にかけられそうになって追われることになった。

恐怖に何度も振り返りながら、裸足で街道を逃げ  
走ったのを覚えている。

たどり着いた城が、鍵をあけてくれないことに腹  
を立て、さんざん悪態とツバとケリを城門にあびせ  
続け、疲労で気絶したあたし。

でも、気を失っている間に、セーラ姫様の“お願い”  
で、あたしは、メイドのエミリとして生きていける  
ことになった。

その時は愚かなことに、お姫様の気まぐれで命拾  
いできてラッキーぐらいにしか思わなかった。

今は、それがどれほど重いことだったのかわか  
る。バカな娘ひとりの代償として、両村への春と秋  
の課税は、5年にわたり免除されることになった。

あたしに最後まで固執していた男たちは、なぜか  
行方不明になったと、村の古老たちから報告があっ  
たそうだ。

そんな“お願い”という切り札を出されてしまっ  
たんだもの。

「こんなふうになっても仕方ないよね」

化粧を落とす手を止めて、回想から今に戻ったと  
き、思いがふと口をついた。

「何が仕方ないじゃ！ エミリ！ 中庭にでるのじ  
ゃ！ 無意味に掘った穴を、無意味に埋め戻す懲罰  
をくらわせてやる！」

マギ老の怒声を見つ、ただひとつ気になる  
ことを、あたしは思い返していた。

あたしの化粧をおえた姫君は、本当にうれしそ  
うに、こうつぶやいたのだ。

「本当にニーナは、いいことを教えてくれたわ。地  
下の悪い封印が無くなれば、わたくしは自由になれ  
ますもの。そうしたら、エミリとどこかに行って、ふ  
たりで暮らせるかもしれないよ」

ニーナという娘は、東の辺境伯領の令嬢だとい  
う触れこみの逗留客だ。

あたしよりいくつかが年下に見えるが、その切れ長  
の眼の輝きは、彼女が子供であることを時々忘れさ  
せるほど、美しく、そして冷たい。

彼女がセーラ様に、何を教えたというのだろう。

姫様の“お願い”の重さにたじろいで、そこを確認  
しておかなかったことを、あたしはすぐに後悔する  
ことになる。

そう、このあと百を数えるほどの間をあけず、地  
下から轟音と奇怪な生き物たちのおめきが鳴り響  
く。それは、この城の人々の運命を大きく変えてい  
くことになる、新しい主人の目覚めの凱歌であった。



## 「十字架」ショートストーリー エミリ出陣！ メイド服とモーニングスター

姫を救うための退魔の鎧を、こともあろうに賭け  
の勝負で取られて、エミリは文字通り硬直していた。  
こういった勝負事では、幼いころから不敗を誇っ  
ていただけにショックも大きく、半開きになった口  
元がしめる気配はない。

そんなエミリに、ニーナは、もうひとつのトラ  
ンクを開いて見せた。

さきほど「こっちはやめておくか」と後ろに下げ  
ていた方だ。

「メイド。あのくせ毛の騎士が持って行ったのは、  
聖暦1600年式退魔兵装…いわゆる〈600式〉。そ  
してこれは1400年式対魔兵装……〈400式〉よ」

ヴァンパイアの娘は、鎧が詰められた巨大なトラ  
ンクを、その細い腕でひょいと持ち上げるとエミリ  
の前に放り投げた。

トランクの中に鎮座する、400式と呼ばれた一揃  
いの武具は、先ほどの600式と比べると、いかにも  
古臭く、古美術品のような風情だ。

いくらなんでも300年近く前のアンティークでど  
うしろというのか、というエミリの無言の抗議を、そ  
の視線から感じたのか、ニーナは説明を付け加える。

「防衛力では、銃火器への対応までならんだ600式  
にかなうべくもない。  
ただ、400式は“あの方”よりも先にこの世に生ま  
れてきた。

そんなちいさな理由だけど、不思議な力があるは  
ずだって、多くの騎士がその秘められたなにかを信  
じてきた。

彼らは朽ち果てようとする400式を、接いで、塞  
いで、足して…あらゆる手を使って維持してきたの。  
修繕のしすぎで、原型はあまりのこってないけどな。  
さ、メイド。こっちむきなさい」

ニーナは400式の革帯を、慣れた手つきで、とま  
どい顔のエミリの腰に巻き付け始めた。

「ちょ、ちょっと待ってよ！ あんたは知ってるん  
でしょ。ほ、本当に、このうす汚い鎧になにか特別  
な力があるのかどうか」

「どんな答えだろうと貴方に選択肢なんてないはず  
よ。メイド」

「いや、さっきの騎士を追って、あっちの鎧を取り戻  
すことだってできるじゃない！ その方が確実に姫  
を助けられるのなら……」

なぜドジっ娘メイドのエミリは  
◆ 鎧や兜をつけ、炎に包まれ  
戦っているのか!? ◆

パチスロ「十字架」は、ある古城で封印を解か  
れたドラキュラを勇者が倒し、セーラ姫を救出する  
というストーリー。ところがこの物語の裏には、セー  
ラに封印を解かせた張本人であるニーナが、セー  
ラを助けたいエミリと組んでドラキュラを退治する  
というもうひとつのストーリーがあったのだ。

ただ、ドラキュラの娘であるニーナはドラキュラ(の  
コピー体)を倒せないで、実際に戦うのはエミリ  
ということに。しかし、最新の鎧はすでに勇者が持っ  
て行ってしまった後。残されたのは旧式の鎧だけ  
……。そんな場面から、困ったエミリとツツツツな  
ニーナのストーリーが始まる。



### ♥ エミリ装備品

エミリが装備しているのは聖暦1400年  
に作られた<400式>という武具。勇  
者は最新<600式>を装備している。

装備品説明	
鎧	<400式>
魔物に対抗する防具。身体(の左半分を中心に、分割された装甲を革帯でつないで置くようになっている(つまり右胸が露出している))。	
武器	モーニングスター、刃をつぶした鈍鎧の投げナイフ
武装信徒の聖なる武器なので、刃は使用できない。	
盾	カワウソの皮を張った、杉のsmallシールド
なぜカワウソ？	
その他	ヘッドギア
頭部を保護。	

「メイド。冷静になりなさい。もともと確実なんてな  
いのよ。600式は確かに400式より強力だけど、ヴ  
ァンパイアの力の前では、ドブネズミとクマネズミ  
くらいの差しかないの。

隙を見て、一息で相手の急所を突く。貧弱な牙を  
使ってね。それができなければ、どちらの鎧を着て  
いても……結局、同じことよ」

「まったく。自分が戦うわけじゃないからって言いたい  
放題ね」

「私が直接戦えない理由は最初に言ったはずよ。そ  
れに貴方は、あの騎士との賭けに負けた。それが屁  
理屈だろうとなんだらうとね。あの騎士が戦いの場  
でも本当に抜け目がないのなら、600式を託すのに  
私は異議を唱えるつもりはない。

むしろオツムの足りない姫様を救うチャンスが2  
倍になったと考えれば？」

そう言うとなーナは、革帯を締める力をさらに強  
めてきた。

エミリは、負けた責任の半分はお前にあったら  
ど、という声を噛み潰して、メイド服の上から締め付  
けてくる鎧の感触を確かめていた。